

## 納西族“三多”神考

木 仕華<sup>※</sup>

毎年一度の「三多神祭」はナシ族にとって最も盛大な祭である。ナシ語の「三多碩」は<sup>サンド</sup>三多神を祭る意味である。三多神はナシ族の一番尊敬されている保護神で、ナシ族全民の信奉神ともいえる。こういう訳で昔、毎年の農歴二月八日になると、各地のナシ人は必ず盛大な式典を開いて、三多神を祭る。そのとき、地元にいる及び外で暮らしているナシ人は例外なく、皆敬虔な気持ちで三多神を参拝し、三多神の加護と厄払いを求める。ナシ族の若い男女が愛情のために一緒に心中をすると決心したときも、二人揃って玉竜山の下にある三多閣（北岳廟）にいて、三多神に自分らの願いをいって、天国に行くときの途上安全を希う。このため、ナシ族が信奉している多くの神の中で、三多神は最も尊敬され、ある意味で、三多神はナシ族の精神的な象徴であるともいえるだろう。

三多神の由来についての解釈や文献記載などをいろいろあったが、従来そういうものは簡単な紹介と推考にすぎない。そして、各研究は各自の立場から違うことをいう。特に三多神はナシの象形文字で書かれた東巴経と民間に流伝している多くの奇妙な伝説によって、神秘的な光の環に覆われ、その奇妙さが人に理解し難くなっている。

三多神の正体はいったい人間と神のどちらだろう。彼はどうやってナシ人の心の中の最も聖なる所にたどり着き、そしてナシ族全民の信仰的な民族保護神になり、また近世にナシ族の民族的な精神偶像及び民族の団結の集中力になったのだろうか。

### (一) 「三多」という語彙の語源とこれに関する伝説

三多神はナシ語の敬語でいえば「アプサンド」(阿普三多)という。「アプ」は「先祖」或いは「爺さん」の意味であるが、しかし長い間、ナシ人が三多神に対する崇敬と共に、「アプ」は神聖な意味を持つようになってきた。漢文化の影響を受け、近世のナシ族学者は「阿」と「恩」、「普」と「溥」の発音が似ていることを理由に、「阿普」を「恩溥」にかえた。これは「恩溥」の恩恵が遠くまで広がるの意味をとるためであるが、これで三多神は恩恵を普及する神になった。

「三多」という語彙の起源について、いろいろな解説があった。「元史・地理誌」には「通安州、在麗江之東、雪山之下。昔名三賤濮解蛮所居、其後么些蛮葉古年奪而有之、也隸大理。……中統四年以麦良為三賤管民管。」の記載があるため、三多はナシ族が分布している地域を指すという考えは一般的である。明朗のナシ族の土司(頭)、木高いが書いた伝記には「世居三甸守規恢」ということを書かれている。この中の三甸はナシ族の住む場所といわれている。麗江の木氏司の

※中国・中央民族大学研究生院

宗譜『木代宦譜』には、唐朝以後の記年と官職の中、たまに自分は「三甸総管」と自称することがある。万国瑜先生は「三甸即賧，藏語称麗江為（sanduo）乃伝播密教建寺得名，較為晚出<sup>①</sup>」。張裕遜氏が編集した『藏漢大辞典』の中に、ナシ族に関する四つの語句についての解釈は以下の通りである。1)絳：いま雲南麗江辺りの古代の名，それは明朝沐英の封地だった。2)絳巴：ナシ族を指している。ナシ族は我が国にいる少数民族の一つである。主な分布地は雲南麗江辺りである。3)絳域：雲南省麗江辺りのナシ族地域。4)絳三賧：南詔国を指している。藏語の発音では絳三賧になるが、唐朝の雲南白族，彝族，ナシ族など建立された地方連合政権を指す。歴史伝説によると，蛮羅閣，閣羅鳳など十三人の王は，253年間（649～902）に亘って統治してきた。その中の第五代は唐朝から南詔王の称号を貰え，一度吐蕃と結盟，賛普鐘と自称した。賛普鐘の意味は御弟或いは五弟である。明朝では沐天五と呼ばれていた。「絳」は普遍的に雲南麗江，大理辺りを指す。「三賧」は旧麗江府地のことを指している。米国の学者ローカ（J・F・ローカ）はこう考えている：「こういう神霊（三多神のこと）は地元のものではなく，実の起源地は遠い北方，つまりチベット東部の草原である。このため，ナシ人は“三多”（チベット語では“三賧”という）の呼び方を麗江に持ち込んだ。たぶん最初これは麗江雪山の名で，後三多神が山の神様とナシ族移民の保護神になった。最後に麗江城が出来てから，麗江が三賧に変わったかも知れない。」こういう訳で，ローカは「三多神は麗江にとって，外来神である。実はナシ人が連れてきた一人の共同移住者にすぎない。」との結論を出した。

以上述べた各種の述説の観点から見ると，三甸，薩多，三賧，三多はただ同じ名詞の異なる呼び方である。つまりチベット語の sanduo の音訳である。「三多」という語彙の語源はチベット先民の南詔に対する呼び方である。南詔亡後，三多の範囲はナシ族が集住する麗江辺りに限られた。後世までも使用されている三多の呼び方は具体的に指す内容には変異があった。清朝の倪颯は『滇雲歷年伝』巻十一の中に，こう書いてある：麗江土府元明時俱資以障蔽蒙蕃……後日漸強盛……蒙蕃畏而學之曰薩当漢。薩当漢の語彙中の「薩当」と「三多」は同じ名詞の変読で，指している意味はうえに述べたことと同じである。

『元史・地理誌』には「昔名三賧，疑即吐蕃称之，則薩当漢者，猶言麗江王也，即東方王」。と書いてある。また『新唐書・南詔伝』には「吐蕃封閣羅鳳為東帝，封異弁尋為東王」と書かれている。ここから「三多」の語彙の意味は「東方」で，南詔王の別称と麗江辺りは新興地域であることを指している。チベット人が麗江は元・明朝の際の本土司は薩当漢（即ち東方王，麗江王）のことで，こういう考えは吐蕃の時，南詔王に東帝の地位を与えられたことと類似点があるが，しかし，この中時間の差があった。麗江の木氏は滇の西北部で興起した時，南詔王はもうすでに滅びていた。しかしチベット族が本土司を東方王，麗江王と呼ぶのは木氏が明朝の時に兵隊を持ち，勢力を遠くまで伸ばし，王と自称したことを反映している。

民間に三多に関する伝説はこういっている。遠い昔，遙かに遠い北方の加寛地方から三多と自称する神様がやってきた。彼は白い甲冑を着し，手に白い矛を以ていって，顔は雪のようだった。白い馬に乗ったかれは，麗江に着いてすぐ地元の頭に「お前らは毎日私に三頭の獣を献上するべ

きだ。こうすれば、お前らはたいへん幸せな暮らしができる。」といった。頭は三多のいう通りにして、毎日三頭の獣を彼に献上した。しかし、しばらくし時間を立って彼らには何の良いことも行われなかったため、頭の妻は密かにぼそぼそとこういった「あの三多が領地に来て以来、我々の家畜はもう大分減ったが、しかしいいことが何もなかったし、幸せな暮らしとはいえないじゃないか」。ちょうどこの時、三多神が突然頭の前に姿を現す、こういうことをいった「貴方の家族が私を崇敬しているため、私は世界中の半分の国王に貴方が大王になるべきだとすすめる、ところが、なぜ貴方達が密かに私を責めるの。いま私は五竜山に帰ると決めた。貴方達は家畜が大分減ったといったね、ほら私はいまそれと貴方達が私に献上した銭物などを十倍にして返します」。こういって、彼は旋風みたいに姿を消した。頭が彼に献上したものはほとんどに十倍が増えて返された。地元の間人は皆ここに集まってきて、非常に不思議と思ったが、しかしその中の秘密は誰も解説できなかった。後その頭の勢力がだんだん衰えた。人々は今更三多神を敬奉するのも遅いと解った。

その後、三多神がナシ族の麦琮という頭の夢に出て、彼に「麦琮、麦琮、私の名前は三多です。私は最も北方の神なんです、これから加寛（地名）から君の所について、作戦を助けてあげる。君は正直な頭だ、我々は君の王国を幸せにしてあげる願望を持っている。絶対ぐらぐらししないでほしい」といってから、白いのろに化けて消えた。これ以来、麦琮が征戦に出るたび、必ず戦場で白い甲冑を着、白いヘルメットを被り、白い馬に乗っている勇ましい将軍が見られる。この将軍は前線で戦って、いつも勝利を得たら、一陣の雨風と共に姿を消してしまう。後麦琮玉竜山で狩をする時、よく白いのろが出たり消えたりするのを見かけた。狩犬が追いにいってもなかなか追えない。やっと一つ白石の後ろまで追ってきたが、白いのろはもう逃げてしまった。狩犬は白石の側にいって、なかなか帰りにたくない。麦琮はそれを見て不思議と思った。彼は部下の阿布嘎丁に白石を移してくれと命じた。阿布嘎丁は白石を持ち上げた時、石は紙のように軽いと感じたため、彼はそれを負って帰ることにした。途中、石は山ほど重くなって、彼はそれをおろして、少し休むと思っていた。しかし、これでもう二度とその白石を移すことができなかった。麦琮はそれは神の奇蹟の現われと思って、奉祀のため、白石を放置している場所に寺を建てた。そこに神様の像も造った。これは今の三多寺である。郷土誌書の記載は今の伝説と似ているところがある。『乾隆麗江府誌』には、麦琮常遊獵雪山中、見獐色如雪；以為奇遂之變為白石，重不可舉。元世祖忽烈征大理，由麗江路敕封雪山北岳安邦景帝，時土府木氏与吐蕃戰，神屢現，白袍將跨白馬助戰。明万歴年重拓廟宇，鑄大鼎大鐘以祀其事，至今每歲二月八日土人祭賽祈禱多驗。」の記載があった。又『光緒麗江府誌稿』の巻四にも「北岳廟一名玉竜祠，旧址在府城北三十里雪山麓。唐時建，相伝昔時有人於山中得到異石，負而歸，至此可憩，重不可舉，郷人神之為異石祠，及南詔封為北岳，即以此石為廟神，元世祖征大理時，特經此，封為“大聖北岳定国安邦景帝”，至今二月八日城郷祀之。」

の記載があった。

麦琮という頭は歴史上に確実に存在した人物であるので、上述の文献記載と民間神話物語の中

の「白石神話」は、やはり本来的意義を持つ神話ではなく、実際は神話と伝説の間のものである。一方、もし白石を中心として考えると、「三多神」は神力を持つ大白石との間に緊密な関係があるため、彼は白石と一体になっている神であると考えで良いであろう。しかし人々が崇拝しているのは白石ではなく、白石の象徴する不思議な神力だ。そして、三多偶像はただの後の人間が附会した産物にすぎない。白石三多神の原始形態とどうやってだんだん最高聖位に至るのかを探求したいなら、我々はナシ先住民が汎神論の観点から生じた石崇拜文化のことから考えなければならない。ナシ文化の多彩な原始構成の一部としての石崇拜は物化的な偶像神祇を推出し、最後に人間の形をした三多神が誕生した全過程を見るたび、ナシ族の発展する歴史と古代羌文化の共通部分を参照しなければならないである。

## (二) 原始生殖崇拜を基とする石崇拜

ナシ族の歴史は征戦、災害と伴う歴史であるといえよう。民族の転移によって彼らは頑強さと向上心が強くなり、長く社会と自然と戦っていくことができた。一方、一步毎の前進でも血と火の代価を払っていった。特に強大な、完全に征服できない外力に対して、超常力を持つ神靈及び想像中の奇妙な力に助けて貰うしかない。彼らはそれらに依頼して、自らを激励しながら地域を拡大し続けた。こういう変化過程はよく神秘的な力を持つ物に対してまず恐怖感を感じ、そしてこういう恐怖感が依頼感になってしまう。こうして、石崇拜文化の中の霊石崇拜及び相關神話が存在する環境があった。ナシ族の汎木石崇拜文化の遺存、特に生殖力を功利的な目的とする原生形態の石崇拜は、ナシ族民間の世俗文化と宗教文化中の白石崇拜及び他の派生的な崇拜文化、例えば、山岳崇拜、雪山崇拜など多元的な崇拜中に含まれている石崇拜要素は石崇拜文化の派銘に連なるが、しかしその元を探求すると、石崇拜は最初の母体で、白石崇拜や山岳崇拜、雪山崇拜などは後のものである。

石崇拜現象は中国と外国の各民族史上で全部程度の差はあるが、多少あった。中国と外国の民族資料の中に、ヨーロッパ人は石斧が雷神の遺物と考えている。古代ギリシャ、ユダヤ及び他の民族の歴史の中に皆違う形式の石信仰に関する記録があった。また多くの民族はよく立錐形或は角状の石を男性生殖器の象徴として崇拝する。『旧約聖書』に見られる石或は石柱は全部聖なる場所と認識された。これは男性の生殖器崇拜から誕生してきたものと見られている。人々は石の魔力を信じ、石は靈物であると考え、石を崇拝した。原始人の石祖崇拜は中国の各民族の中に普遍的に存在している。彝語圏の民族の中の哈尼族村の神艾瑪栖息の神樹の側の石は、村の魂として祭られている。景語族の場合は、村の中心を象徴する木の回りには石を築いて、村の中心石と呼ばれているなど。こういういろいろな石は全部神秘的な生成力或は力を持つ聖なるものと見られている。石祖崇拜中の男女生殖器崇拜はナシ族の中で最も顕著である。近代に至ってもナシ族の中の多数の生育禮俗には生殖が功利的な目的としての石祖崇拜を残している。例えば、麗江山麓にある円錐形立石は麗江東坝に住むナシ族、白族の女性に男性生殖器として崇拝され、生育の祈りもなされている<sup>③</sup>。瀘沽湖地区のナシ族の中に、いまでも生殖器崇拜の習慣が残されている。

これは表現形式でいえば、原始的な自然崇拜の色彩の強い生殖崇拜である。四川の塩源達孜村のナシ族が、村の後ろの格姆山腰にある長条石を男性生殖器とと思っているなど<sup>④</sup>、類似な石祖崇拜は羌族、白族など古氏族の後代の中に広範に存在している。古代羌人は石が生殖力を持っており、そして石と人間の間に血縁上の関係があるから人類は石の子孫であると考えていた。

ナシ族の石崇拜の範囲は生殖禮俗の一面だけに拘らない。東巴教の經典伝説及び神祇に関係あるものは皆石崇拜と緊密な関係がある。東巴教は原始宗教として、中には沢山の「靈」の觀念がある。東巴教の中に、人類の始祖米利董阿普（略称「董」）と配偶「色」という人格と神格を両方持つ神祇がいる。二人の神祇はそれぞれ陽神（董）と陰神（色）を代表している。二人の神祇は世界中の万物を作り上げ、「石」で「董」を象徴し、「木」で「色」を象徴している。後世代のナシ人はこれらを二つの白い錐形石で表示し、「董魯」と呼んでいた。ナシ人は二つの「董魯」を大門の両側に立てて、お正月などの行事があった場合には祭る。そして「董」神と「色」神に安全と幸福を祈る。これは漢族の門神と同じ意味で、彼らも神を守る性質をもっている。同ナシ族の祖村の中の道祖神、村神など保護神は外来の脅威を防ぎ、そして内部世界の随意性を外向する行動を止める役割も果たしている。ナシ族が奉祀する北岳三多神は丁度「董魯」石と類似する機能の拡大形態である。三多寺が位置する玉竜山麓は丁度自然空間としての玉竜山と山下の社会空間と接する場所だったが、三多寺はある意味でいえば接するの標識であるが、入り口でもある。こういうことを三多の最初の形象——一つ普通の石と関連させると、三多神は接する場所の保護神である、つまり拡大した「董魯」と言っていいてあろう。

こういう「董魯」と類似するものは、東巴經中の神話物語の中では、各神、精靈と人類祖先は皆各自の「董魯」があるから、独特な超自然の神秘力を形成し、これを利用していろいろな対立的な鬼怪神靈と戦う。上に述べた門神「董魯」は超自然力の「靈石崇拜」である。こういう靈石崇拜の功利性と原始生殖崇拜中の性器石祖崇拜の間に差異があったが、しかし両者は同じ起源の異なる支流、即ち両者は源と支流の關係にすぎない。ナシ族は祭天、祭雷神の儀式を行うとき、神石を立てなければならない。家の神の象徴は竹籠に丸い石を入れて象徴する。永寧のナシ族は火塘の上に先祖を象徴する石（鍋庄石）を置いてある。こういう多元化靈石崇拜は、東巴教の中でこう表現している：石は巫術性の武器としてナシ族の石祖を反映している。靈石崇拜は単一的な生殖力崇拜文化の意義から神鬼を追い出し、邪気をおさめる機能範囲まで広げ、接する保護神とナシ民間信仰空間の分界の標識となってきた。これは汎神論觀念下の石崇拜が他の派生態の山神崇拜、雪山崇拜など多元化の状態に移行した。これは原始生殖崇拜文化の宗教觀念領域での幅射と発展である<sup>⑤</sup>。

また、異なる地域に存在しているナシ族の石祖崇拜は全部生殖力が功利的な目的とするが具体的に崇拜している石祖が代表する中身と外在形式とに相違点がある。父系社会構造を主体とする麗江のナシ族中では、石祖崇拜は具体的に男性を指している。しかし永寧のナシ族中には女性石祖崇拜の習慣がよく残されている。こういう差別は生殖崇拜文化中の一大奇観といつてよいであろう。つまり地域の異なり、社会構造に差異があるため、具体崇拜中の崇拜主体に性別差異があ

るのは明白だ。こうなる原因は細く研究分析する必要があると思う。

### (三) 石崇拜と白を拝める観念で結成された白石崇拜

三多神と民間伝説の記載から、我々は三多神と白石の緊密な関係が解ってきた。しかし、なぜ三多神の偶像形象はいつも白色を主体とし、こういう飾りをする文化の本質、そしてその源流は何であろう。顔は雪のように、髪も髭も真っ白、白い甲冑を着、白い馬に乗り、手に白い矛を持ち、いつも神出鬼没な変化をする。例えば、時々白石に化ける、時々白のろに化けるなど。

氏、羌人の子孫のとしてナシ族の色彩崇拜観念の伝承は古羌文化の白を拝める習俗と結託している。両者は源と流れの関係である。色を拝めることは氏羌文化の共通成分の一つである。ナシ族の東巴経と各地のナシ族の民俗から見ると、いまでは多くは白は善の代表で、黒は邪悪の代表であり、白を褒め黒を貶す心理伝流がある。ナシ族の長編史詩「黒白戦争」は善を代表する白集落が邪悪を代表する黒集落に戦勝したことを記載する巨作である。これは白を褒め黒を貶すの代表的な例である。

「黒」という語彙はナシ語の中で「黒色、毒、深厚、苦、啞、吝嗇」と解釈されている。ナシ族の象形文字中の黒色字素の中にもこれを完全に体现している。象形文字中の同じ黒い三角は「瘦や啞、或は困難苦しいの意味」を表示する。「巨毒」の語彙の意味については、毒草みたいな黒い花の側に黒い点を付けて書く、「毒、残忍」の意味を現している。象形文字の「苦」という字は人の口から黒いものが出てくるの形で書くが、そして「毒鬼」の形象は細くて黒い頭を付けた人間である。太陽の形象の中に四つの黒点を入れて黒道日、つまり不吉を表示する。また象形文の中に男女の奴隷を表示する場合は、よく奴隷形象の人の頭の上に黒い点を付けて、その人の低い身分を表す。文字学者は文字の発展規律から見ると、濃い黒を使って意味を表すのは、字を造る意味を表す手段がまだ未発達のための応急措置であると考えている。こういう応急措置は簡単だと思われるかも知れないが、しかしこういうことの実現過程自体はもうナシ族の先民が黒色に対する貶すと憎むの伝統を入っていたことを示している。

黒を貶し白を褒める心理はナシ族の先民が伝えた言語にも現されている。ナシ人は「分清是非」（是か非かを見分ける）をいいたい場合は、「拍拿芋可」（白黒を明らかにする）というのである。これは漢族の「分清黑白」という語彙と比べると、黒と白の順番が反対になっている。ナシ語は善良、気前がいい人のことを「謬拍」というが、白い目の意味から善良、気前がいい意味を押し広めた。これと反対に情けない、けちんぼうのことは「謬拿」というが、黒い目の意味が押し広めて、けちんぼう、意地悪の意味になる。ナシ語は「細米」を「崇拍好耆」といって、「金の粉見たいな白い米粒」を意味する。雑穀を「黒穀」という。またナシ族民間宗教礼俗中にも黒を貶す、白を褒める伝統が見られる。四川省木里県屋脚村のナシ族が祭っている女神「巴丁拉木」の偶像は白い服を着、背中に白い羊の皮を被り、白い驢馬に乗っていた<sup>⑥</sup>。四川省右所のナシ族は榮特拉布山を男神とし、そして彼が偶像として絵に書かれている。絵の中の彼は白い馬に乗って、側に一匹の白い犬と一羽の白い鳥がいた。東巴経の中の魔女司命麻左固松麻の側には、一匹の黒

犬が伴をしていた。東巴が儀式を行う時、白い毛氈を敷くが、喪の終わりと超度式の際は東巴のやり方で、頭に白い圓頂の毛氈法帽を被る。東巴経には「白い敷布団は神の座具、黒い敷布団は鬼の座具」の言い方がある。

四川大学の趙衛幫教授の『秦詞白帝解』についての考証によると、この本は遊牧民族が牲の色を使う時こう書いてある：「牲の色に対しては、遊牧民族中で普通白色と淡色が中心となっている。例えば、匈奴は白馬が盟及び拓跋氏之用白羊など、全部同一種類である。ここからは白は善、黒は悪を代表するのが、多数の原始遊牧民族の共通宗教特徴である。」これで、古羌人の白を拝める習慣のものが推知されるであろう。ナシ族は古代西北から南へ異動した羌人の後継民族として、古羌人の白を拝める文化習慣を継承してきた。古羌人の白を拝める習慣は史書の中によく書かれている。北宋の楊仁（976-1030）は『談苑』の中でこう書いた：「羌人以心順為心白人，以心逆為心黑人」。『明史・四川土司』茂州衛条：「其俗以白為善，以黒為悪」。白色の旗は平和の象徴とし、征戦後の回復と平和模様を表している。ナシ族女性の服装と飾りにも白と黒の対照を中心として、淡い青い色が引き立てられて、純潔優雅自然な効果が出ている。同じく、これは白を拝める習慣のもう一つの内面——審美功利目的の反映である。

ナシ族の数多くの神と東巴教の神祇の中に「董色」二神即ち「董魯」は白石で代表される以外、他の例えば生育神、畜牧神、五穀神、豊収神、村神、勝利神、富裕神などナシ族の主な神は全部神石で象徴されているほか、多数は白色である。こういう白を拝める習慣は、やはりナシ族の白を拝める観念と石崇拜、石祖崇拜（生殖力を功利的な目的とする）との相通、結合後の産物である。このような白崇拜はナシ族の白に対しての観念、石祖崇拜（繁殖力を功利目的とするもの）に互に通じて結合してきたものいわば——白石崇拜であろう。

#### （四）山岳崇拜を基盤とする雪山崇拜

ナシ族の白石崇拜観念は白崇拜習俗と石崇拜と絡み合って結合したものであるけれども、白石崇拜観念は元々民間信仰に立脚し、更に三多神のような神様に変化してきたのであろう。それはナシ族の山岳崇拜と緊密に関わっている。どんな民族でも彼らの発展中に特定な生活、生存環境がこの民族のある特定な観念に重要な影響を与えた。ナシ族の歴史発展は川滇藏この三省の接している高原山地で起こっていたが、ナシ族と緊密に結び付いているものは様々な山と峰である。高い峰や山脈が多くあり、怪しい石並や岩壁が危うく立っており、それは人々に恐ろしさあるいは神秘的な感覚を与えた。山の中の自然現象は複雑で変化も多く、人の生存と死亡、衣食住すべてが全部山と関わっている。認識の能力は限られ、先住民は山や山の中の自然現象及び自然現象の奇跡を理解しない、そして自然現象が人格化され、山を神のいるところと見なし、山の向こう側にもすぐく力を持っていた神様が存在していて山の全てのものを支配している。誠に山の神を祭れば、恵みが得られる。逆だと、災難が招かれ、懲罰もされると彼らはそう考えている。ナシ族の民間行事のなか、山の神を祭る「是日」という行事がある<sup>⑨</sup>。その源は原始東巴教に於けるシャーマニズムを元にできたと考えられる。「是日」はナシ族の人々の心の中の山の神である。

彼は山の万物を主宰する。だから、ナシ族の民間の中で、万物自然を主宰する神を崇拝する伝統がある。「是日」神を祭るとき、東巴は「是日」経典を読み、ナシ族地域の各地の山に住む「是日」神を誘い、例えば、麗江の玉竜雪山、文筆山など、地元あるいは別の地域の山が「是日」神保護の上でナシ族の人々はここで放牧、狩り、採集、伐採できるように乞い願っている。新しい年でも、「是日」神がナシ族の子孫がここでの暮しの場所を提供できるように望んでいる。「是日」を祭る伝統とナシ族の民間における祠祭との関連から見てみると、ナシ族の山神崇拝は石崇拝と通じている。ナシ族の祖先のお墓のところには山神を象徴する石が置かれている。墓参りに行ったとき、まず山神の石を祭り、その次は世代別による順番から、墓参りを行う。墓地の中の「山神」という石は区別できるような具体的な特徴がないから、元のこと及び伝説も分からない、どんな峰を代表するかも決まっていない。ここで祭っている石は山であり、山は石の拡大形態である。ナシ語の中、「山」と「石」の意味は通じている。ナシ語は「ル」であり、玉竜山は「ウル」である。そこのウルは山であり、つまり山も石であることだ。この状況は漢語の中も類似する例があり、『説文解字』は「石、山石也、石従厂、従口」、「厂、山石之崖岩、入可居、象形。」と書いてある。山と石の関係はそこでも通じている。山と石の通じるところから、ナシ族の祖先の観念の中、山神、すなわち石神の見方が生じた。いわゆる「山神石」は実際は山神を祭るということである。ナシ族の山岳信仰の中、雪山崇拝はこの中の独特な形式であり、それは白石崇拝と完全につながっている文化である。ナシ族の人々は麗江の地域に住んでおり、そこには一年中でも融けない雪山があり、例えば、グンガ山、玉竜山、ハバ雪山など、彼らは風を呼び雨を招き、気候に影響する。雨や雪の量の増加又は減少、泉の流れ（雪水）の多少、これらの要因は農業と遊牧業に影響を及ぼしている。雪山の様々な恵みから、自然に人々は（ナシ族の人々は白を崇拝する）雪山の外付けとする雪（巨大な白石形象）に対して功利的な目的とする雪山崇拝が生じた。

ナシ族の白石三多神の元来の形象はちょっと変わっていた白石である。しかもそれは玉竜雪山の中で現れ、外観の色は真っ白である。後の人々がそれを祭る目的は、ナシ族の人々の生活に影響をもたらす玉竜山を祭るためである。だから、白石は玉竜山であり、白石は玉竜雪山の幻のような存在形式である。そして、白石を表す形象——三多神に形成したと考えられる。それも玉竜山の山神である。ナシ族の人々の玉竜雪山に対する崇拝は農業、牧畜業を豊かに祈る目的である。何故かという、玉竜山の下麗江盆地にとって、農業生産を行うとき、水と光は二つの重要なエネルギーである。水は山から流れ出る、山が高ければ高いほど水が長く流れ続き、山は青ければ青いほど水もきれいになるわけである。水を求めることは極めて山に対する崇拝に転換する<sup>①</sup>。この功利的な関係は明らかであろう。三多神は元々一つの山の神、それは麗江地域に最も高い、しかもナシ族の全ての社会生産発展に直接関わっている山でもある。その外形の偉さはある程度に玉竜山が多くの中山の聖なる山であることの基礎となってきた。それで、玉竜山を代表する山の神——「エンボ三多神」は多くの山神あるいは他の神の中で一番の地位を得たことも当然であろう。さらに三多神は最後まで山の神から最も尊敬される戦神の座に座り、ナシ族の保護神になってナシ族の精神的象徴ともなってきたのは歴史発展の必然性であろう。

### (五) 三多神の人間性と世俗化

ナシ族の地域は麗江、永寧、川西の辺りであり、それは歴史の上で土蕃王朝と南詔国の二つの政権の接しているところであり、地理的原因でナシ族の歴史の発展はこの二つの政権の争いを超えることができない。両方の力の増加と減少はそれらに夾まれていたナシ族に巨大な衝撃を与えた。大民族の間に夾んで生き延びるならば、両政権の戦いの中で自らの力を強めることは唯一の方法となる。何回もの戦争の失敗を反省した結果は、ナシ族内部の団結を堅め、戦闘力を強めるこそ、民族の生存と発展が維持できることを彼らに認識させた。このような歴史背景の下で、三多神は彼が代表している玉竜山と一緒に、自分の民族の生存と発展を維持する超自然の力の属性を彼に属させ、精神の土台となった。戦いという背景における三多神は山神あるいは境界を守る神から尊敬なる戦争の神になってしまったのである。それに基づきナシ族の人々はお寺の中の像を作り始め、三多神を祭り始めた。それは三多神の魂がよく現れるように、直接ナシ族を保護し、敵に向かって自信と力を強めるためである。三多神は戦闘の神とする特徴は実際にナシ族の伝統における尚武的な風俗の伝承と広がりだと考えられる。

唐朝の代宗大暦十四年(779年)に至って、南詔国の王様の異牟汭は唃廝囉城に移り、(今の大理の太和村)元の朝号に換えた。至元の晩年(1270)に玉竜山を北岳と指定し<sup>①</sup>、寺を建てた。その時、三多神は統治者の統治を強めるため、神化され、三多神は独特な身分を得ていろいろな神祇の中の第一となり、地方政権も力強く尊敬を払った。1253年の忽必烈は大理を訪れ、麗江を通る時、「三多神」を「玉竜山の神」と名付けた。さらに「大聖不安邦景帝」という道教法号を与えた。その時の三多神は既にナシ族の人々の心の中の聖壇となり、尊敬される北岳大帝になっていた。民間では、三多神は二月の羊の日に生まれ、だから、毎年二月の羊の日に、三多廟で行事を行い、にぎやかに三多神を祭る。周辺のナシ族、白族、チベット族、僰僰族の人々が訪れに来る。三多神は同時にこの地域の保護神になったのである。彼の人気はナシ族の地域だけに限らない事になっている。それは南詔国王の封賞と直接に関わっているけれども、もっとも重要なのは白族文化の影響をも受けたのである。南詔国はナシ族地域を管理して以来、北方のチベット文化の圧倒的な影響は南詔国の全盛期に入ると弱くなってきた。白族文化も徐々にナシ族の民間文化の中に入り込んだ。南詔国おんのお勧めで三多神は当然に例外ではなくなった。三多神は外族に信じられ、この地域の最大の保護神となった。それも白族の民間宗教——本主崇拜の影響と分けられないのである。北岳廟(南詔王の封号)の中、27の占いを刻んである牌と雪石牌における記録の中の白族語であることはこの一例であろう。この他、ナシ族の東巴経の中に北岳三多神を祭るために使われる『祭北岳三多神經』という経典がある。この本は白族語で読む経典であり、ナシ族の東巴文字で白族語を記録する経典である。それは白族文化が既にナシ族の宗教儀礼に入り込んだ事を証明するのである。

統治者の三多神に対する重視は三多神が元来の単一な山神形象から家族連れの世俗的な神に変わらせた。後期の北岳廟の中に、三多神を彫刻にしたほか、その両側の少男少女と文武官の二人または三多神の妻と妾の像も設けられ、まるで世俗の形象である。それは三多神を世俗化し、彼

の雲南省の西北地域の尊敬される地位を減らすためのである。逆に、当地の各民族の人々は心の中の偶像を美化し、地位を高め、それも各民族の内的観念における三多神に対する崇拝が長期間に心理の奥に沈んでいる必然性の反映であろう。ナシ族の民間の洞経音楽楽隊という組織——洞経会は三多神をこの会の祭る神祇と供え、しかも『北岳宝浩』を書き上がり、それは三多神を祭る儀礼を音楽の会に納める絶好な例である。ある功利的目的のため、三多神を洞経会に入らせ、そこから、三多神は洞経会のメンバーの心の中にどのような地位があるかを我らに分からせてくれたのであろう。ナシ族の人々が三多神に対しての尊敬と崇拝はこの地域の他の宗教の中の神と比べるものではない。ナシ族の人は商売に外出するとき、どこに行っても、何人か集まると必ず三多神を祭り、彼の保護を求める。だから、ある時、ラーサに住んでいたナシ族の人もそこに三多廟を建てた。それらは三多神がナシ族の人々の心の中の聖なる地位を表しているのである。三多神を美化し、または力強く崇拝するやり方は実際にナシ族が外来文化に対しての吸収と民族化の過程である。それはナシ族の元来文化が外来文化との衝突につれて発展できるような要因と思われるのである。述べたものをまとめて見れば、我々はナシ族の尊敬する保護神の「恩溥三多」の歴史変化の流れ、つまり、シャーマニズムにおける樹木、あるいは石崇拝の中の生殖を功利的目的のための原始石祖崇拝——石崇拝文化と古代の氐羌における白崇拝観念と結合して形成した白石崇拝——山岳崇拝と白石崇拝が分かった。さらに、雪山崇拝との共通点により、玉龍雪山神が作られた。歴史上における民族の間の戦いをきっかけに、文化の浸透の結果は山神に戦神と保護神の性格を加え、歴史の各朝代の統治者の利益の為、功利的な壇号を与え、三多神は一番尊敬される地位を固めた。最終に、三多神は民族に崇拝される神になった。それは民族の歴史文化、民族精神を集中的にまとめた聖なる民族保護神であり、しかも民族精神の外的象徴ともなっているのである。「恩溥三多神」とナシ族は昔から今に至って歴史及び文化との関連が緊密である。彼の原始形態の白石崇拝は古代氐羌における石崇拝文化の分流であり、それは民族化及び地方化された形態である。

#### 注

- ①方国瑜「木白宦譜概説」は『麗江志苑』1988.2号に載っている
- ②J. F. Rock「The Ancient Na-Khi Kingdom in south west china」(「中国西南の古代ナシ族」)  
【Cambridge】1947
- ③⑤揚福泉「東巴教に反映されている生殖崇拝文化を探討」『麗江志苑』1989.6
- ④⑥⑦嚴汝嫻、宋北麟『永寧ナシ族の開分制』雲南人民出版社1984年版
- ⑧趙衛幫『秦詞白帝解』
- ⑨「是日」に関する資料は和品正の「麗江ナシ族の人々の民族節と原始宗教」における「祭山神—是日」のある部分を引いたものである。この文章は『麗江志苑』の1989.6号に載せている。
- ⑩白庚勝「玉龍第三国の秘密を解く」『民間文学論壇』1991.2
- ⑪『麗江文史資料』第二集 麗江県政協文史組編 (沈雪軍・筑波大学大学院地域研究科訳)